

「軽度」身体障害者のライフサイクルにおける困難な場面への対処プロセス —対処方法と障害に関する意識の変容—

太田 啓子

大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程

The Coping process with difficult situations in their lifecycle that the people with mild disability experience - strategy and alteration of consciousness on their disability -

Keiko OTA

Graduate School of Human Life Science, Osaka City University

Summary

The purpose of this study was to clarify how people with mild disability cope with difficult situations. Four people with mild disability with three conditions were examined by life-story interview survey. The three conditions were (1) visible physical impairment, (2) orthopedic impairments, and (3) working after attending non-famous schools.

People with mild disability coping with difficult situations were identified after reviewing five categories revealed by analytical results of the data collected. People had special meanings for whatever they did, and their strategy was that they did not let their disability become obvious in their relationship with able-bodied people. Such experiences allowed them to be self-confident. It is important, therefore, to clarify the coping strategies and needs of people with mild disability from the general perspective of their life.

Keywords: 「軽度」身体障害者、ライフサイクル、対処方法
the people with mild disability, lifecycle, coping strategy

I. はじめに—研究の背景と目的—

1981年の「完全参加と平等」をテーマにした国際障害者年からはや四半世紀が経過した。その間、日本でも障害者の自立と社会参加を目的とした、障害者支援のための法整備がすすめられてきた。

しかしながら、これまでの日本で制度上「支援」の対象とされてきた「障害者」とは元来、等級上の重度障害者、特に常時介助を必要としながら生活する障害者を対象としていることが多かった。家族、とりわけ親による介護が基本とされてきた日本では、介護負担軽減や障害当事者による自立生活を目的とした支援を中心になされてきた。

一方、「軽度」身体障害者は「やればできる」「もっと重度の人がいるのだから」という周囲のまなざしとともに、社会からは特別な配慮が必要な障害者であるとの認識はされてこなかった。そして障害ゆえの困難な場面に對しては「軽度」身体障害者本人の「努力」によって乗り越えるべきだとして捉えられてきた。そのため彼らが、こうした困難な場面に直面したときにどのような方法で乗り越えてきたのかという実証的研究は、これまでのところない。

「軽度」身体障害者は多くが普通学校・普通学級で学び、一般就労を経験する。「軽度」身体障害者が社会参加するうえで障害ゆえに困難な場面に直面したとき、田垣は

その障害の目立ちにくさゆえに、介助希求のため戦略的呈示を行うと述べている¹⁾。それは彼らが「どっちつかず」のつらさを抱えているためだという²⁾。しかしながら「軽度」身体障害者は困難な場面に直面したとき、常に介助を希求しているとは限らない。「障害者」や「介助」にスティグマを関連付けてしまい、どうしてもできないことは「あのブドウは酸っぱいのだ」³⁾と価値付けてあきらめてしまうこともあるのではないだろうか。

以上から「軽度」身体障害者の困難な場面への対処方法は、一つには限定されないと考えられる。本研究では障害等級に基づく「軽度」概念を使用しない。田垣は、軽度障害者を「日常生活上の活動の制約や困難の程度が低い」障害者と定義している⁴⁾が、本研究では田垣の定義に加え「それゆえ常時は介助を必要としない障害者である」と定義した。

そこで本研究の目的は、「軽度」身体障害者が困難な場面を乗り越えるための対処方法と障害に関する意識をインタビュー調査から明らかにし、対処のプロセスを導き出すことにした。

II. 調査

1. 調査目的

本調査目的は、「軽度」身体障害者が困難な場面を乗り越えるための対処方法と彼らの障害に関する意識を明らかにすることとした。

2. 調査の対象者と方法

本調査では、以下の3つの条件を兼ね備えた「軽度」身体障害者を対象とした。

- a. 可視的な身体障害をもつ。
- b. 肢体不自由者。
- c. 障害を持ちながら普通学校・普通学級に通い、一般就労を経験した者。

志賀は「可視的な身体障害をもつ場合にはスティグマを受けやすい」と述べており、障害が可視的か否かによって当事者の「障害受容」にも影響を与えている⁵⁾。本調査では、可視的な肢体不自由の障害を就学前にもち、就労を経験した人を対象とすることで、障害を持たない周囲の人々とのような関係性の中で彼らが困難な場面に向き合い、乗り越えているのか、そのときの対処方法がライフサイクルを通してどのように変化することも明らかになると考えた。

プロフィールは表1のとおりである。

本研究では、以上の条件を満たした4名にライフストーリー・インタビューを行った。調査手順として、対

表1 インタビュー対象者のプロフィール

語り手	年齢	性別	障害名	部位	状態
A	40	女	四肢関節拘縮症	足・手	歩行・車椅子
B	62	女	ポリオ後遺症	足	歩行のみ
C	61	男	ポリオ後遺症・側弯症	足・腰	歩行・杖・コルセット
D	62	男	ポリオ後遺症	足	車椅子・松葉杖

象者4名へのインタビュー調査は2005年1月から2005年6月まで、個別に1回から4回の非構造化面接を中心に行った。対象者には、学齢期以前や学齢期、就労期、退職後での経験を親や友人、同僚などの他者とのエピソードやそのときの気持ちなども交えて自由に語ってもらった。インタビューの途中で沈黙が続いた場合に、筆者からあらかじめ用意してあった質問を投げかけるか、「そのときはどのような気持ちでしたか」などの質問によって語りを促した。場所は、インタビュー対象者の自宅、公共施設である。

3. 分析方法

分析方法は、マイルズとヒューマンの分析枠組み⁶⁾を参考にした仮説探索型研究である。これは①データの圧縮、②データの表示、③結論の導き出しと検証という3つの構成要素からなる。聞き取ったライフストーリー・インタビューの逐語録を作成した後、困難な場面を乗り越えるときの障害に関する意識について述べられている部分を抽出し、コーディングをするとともにカテゴリーを作成し、各々について分析を行った。

分析手順はたとえばまず、「それまで歩いて通ってたんやけど、自転車、乗るより側車がわりに。ついて通ってたね。そんで置いてからも歩けんようになって、ポケットに手つっこんで歩いた。(姿勢を正す支えとして)そんでポケットの下が擦り切れてもってて。繕うのに母親が苦勞してたわ。」という語りを「自転車を杖代わりにする。」と圧縮し、「物の工夫」というコーディ

表2 インタビューから析出した下位概念及びカテゴリー

下位概念	カテゴリー
体の他の部分で代償する 物の工夫 設備の工夫 ルールの工夫 装具	①生活環境の拡大のための工夫
身内のサポート 役割を分担しあう	②他者との持ちつ持たれつ・分担の関係
周到な事前準備 自分ができる範囲で参加する 安心な環境	③安心できる環境の優先
「自信」をもつことでの開き直り 世の中のバリアフリー化	④障害の戦略的呈示
二次障害 二次障害への準備	⑤重度化にそなえた準備

ングを行った。次に、同様の手順で作成された「体の他の部分で代償する」「設備の工夫」「ルールの工夫」「装具」という下位概念から「生活環境の拡大のための工夫」というカテゴリを作成した。

以上の手順によって、14の下位概念から5つのカテゴリを析出した。5つのカテゴリを時系列に並べ替えたものが表2である。

Ⅲ. 結果

ここでは、5つのカテゴリについて、語りを引用しながら説明していく。

1. 「生活環境の拡大のための工夫」について

「軽度」身体障害者は普通学校・普通学級に通い、健常児とともに生活する。彼らはどのように、子どものときから障害ゆえに困難な場面に対処していたのだろうか。

B：不便やったよ。バスのステップ高いのとか、そんなんがむしゃらっていうか。

D：もうありとあらゆることした。子どものときなんかはずかしいことないやん。中学ぐらいになったらはずかしなけど。(動かない足を手で補うため)手にげたはいて逆立ちで向こうの家着いたりな。

D：(手の力だけで)木も登ったし、はしごも上ってたし。自分でできたから。家も、補装具する前は自分の部屋、2階もろてたもんね。はしご、普通の階段やで、腕で上がった降りたりしてたからね。すごい力やったけど。

彼らは困難な場面を「不便だ」と認識しながらも、「がむしゃら」に頑張っていた。そして彼らは、困難な場面を体の他の部分で代償する方法を自然に会得して、自分なりの対処方法を編み出していた。

A：セミナーとか合宿に行ったとき、柄の長い棒もって行ったら邪魔になるからもって行けなくてね。着替えのときとか、傘使ったりね、傘にこう、(ズボンを)ひっかけてね(はいた)。

D：中学校ぐらいまでは手で回すような

車椅子を自転車やさんで作ってもらって。それはもうスピード自転車並みやからね。自由自在に遊べたね。そんなんやからスピード出過ぎて田んぼにはまったり。自転車のタイヤやからね。自転車を改造して手でこぐねん。

A：バリアフリーじゃないやん、学校が。トイレが洋式じゃないから。父親がね、ポータブルトイレを買ってきて小学校の女子のトイレの一つの部屋に金具で、手すりを取り付けてくれてん。で、おしっこ一人でできるようになったんよな。だから一階に教室があるときは一階の一番近いトイレにポータブルおいて、二階に教室移ったときは二階にもって行って、三階に教室があるときは三階にもって行って。トイレを動かして学年が変わっていったわけよ。教室動くからみい。

次に「軽度」身体障害者は物や設備の工夫を行っていた。「軽度」身体障害者のこうした工夫は、日常生活が出来る限り一人でできるための環境整備であった。

このように彼らは日常生活上に「ありとあらゆる」工夫や体の他の部分で代償しながら、障害をもたない友人と同じように行動したり遊んだりして、生活環境を拓いていくのである。

次に示すのは、彼らが大人になってからの語りである。

B：お琴習ってて、それも斜めずわりして。そうや、手術してから着物が着れるようになってん。草履が履けるようになったから。今は履けへんねん。若いときは履けて、着物着て、会に何回も行ってたわ。うれしかったわ。草履っていても角度があるから鼻緒が逃げるし、裏にゴムとかはあって、まがりなりにも履けてん。

A：大学受かった次の日に警察行って適正試験受けたら、手動式の車取りなさい、って言われて。まず車を買ってん。そんで自動車学校に持ち込んで、ひっぱったらアクセル、押したらブレーキの車。去年20年の無事故無違反。車なしではとてもとても。お出かけが多いから。

Bは草履が履けるようになったから、着物を着てお琴の会に行けたのだという。Aは車を改造することで社会参加の幅を広げた。彼らはまず、環境を自分で整え、一人ででもできることを確認してから生活環境を広げていた。

2. 「他者との持ちつ持たれつ・分担の関係」について

「軽度」身体障害者は1で見えてきたように、工夫をすることで日常生活の大半が一人でできるようになる。しかし、工夫してもできない場合には他者のサポートが必要となる。

A：(大学薬学部で) 長い時間立ってられやんから、実習のときも30分かきまぜよ、って言われても立ってかきまぜんのしんどいから、ほなもう友達かきまぜたるわーって言って代わってくれたりしたけどね。「Aさん、レポート書いて」とか「英語、訳して書いて」とか。グループ実習だったから分担すればええことやね。

「軽度」身体障害者は工夫してもできない場合は、他者のサポートをかりる。しかしながらそのような場合でも、「サポートを得る人・与える人」という一方通行の関係になってはいない。Aは、他者のサポートは自分への介助行為ではなく、「分担」行為に過ぎないという解釈を行っていた。

D：掃除なんかは、二人とも(注：妻と自分) 不自由やからね。高いところなんか。姪なんか、ちっこいときに車に乗せたったから、父親働いてたから、友達連れてきよったら一緒に遊びに連れて行ったりしたからね。そんなんが頭にあるのか、もう結婚して子どもも2人おるんやけど暮れに掃除しに行くわーいうて来てくれてな。もう高いところも全部してくれて助かったけどな。そのぐらいかな。

Dも昔、姪と遊んであげたから今、掃除をしにきてくれる、という解釈をしていた。すなわち、DもAと同様に、他者のサポートを受けることに関して、一方通行の関係性にとどめていない。このように解釈することで、彼らはサポートを受けることと「障害者という低い自己

評価」⁷⁾とを関連づけていなかったと考えられる。

3. 「安心できる環境の優先」について

「軽度」身体障害者は「一人でできる」ように環境整備を行いながら、行動範囲を拡大していた。工夫でできない場合に前項で指摘したとおり、分担関係で他者のサポートを得ていた。

A：ほら、お出かけするじゃない。困るわねえ。おトイレ探すのに一苦労。今日なんかもどこにしようか考えたけど、あなたも車椅子っていうし、もっとおいしいレストラン知ってんねんけども時間長くなったときお互い洋式でないと、ってなったときに、どうしようかなって。食事もしたいしゆっくりしゃべっても違和感なく、あんまり移動もしたくないし、ってなったらこんなとこしかないし。

また、「軽度」身体障害者は、成長にしたがって様々な経験をし、次第に参加をすることに対して自分なりの判断基準で優先順位をつけていくようになる。Aはおいしい食事よりも、排泄に不安のない環境を優先した。彼らは安心できる環境を周到に準備してから社会に参加していくのである。

B：靴が履きやすいのあったらものすごい気分が軽くなるけど、合わない靴で歩いてると、ものすごい気が重いというか。しんどいしんどい。行きたいんやけど、したいんやけど、歩くこと考えたら・・・っていうの結構あったな、確かに。したいんやけどやめちゃう、っていうこともあったと思うわ。靴ぬいで上がったっていうのも大変で、なんかそんなん頭、先先にかすめんねんやんか。本当に大事なことも、そういうことがクリアできひんといけへんというか、そういう時期あったな。

D：仕事は必死やったね、やっぱり不自由やから「得意先とられんのとちゃうかなー」って不安はあったね。付き合いもいかへんから。・・・(仕事を) もらってる(取引先の) 会社の社内旅行やとかいけへんかーって誘われても断ってたからね。そんな

ん、迷惑やん、(介助を)したろーって言うてくれてても、仕事もらってる立場でまだ迷惑かけるっていうのはな。社長が言うてただけで、そんなん従業員とかもいてんの。飲み会っていうのも一切行かなかったね。

Bのように準備がうまくいかないときは、参加自体が危ぶまれてしまうこともある。また、Dは他者のサポートを「迷惑をかける行為」と捉え、飲み会には一切参加しなかった。

B：職場に行き行って特別にしてもらってことは……。いや、自分ができる範囲の職場にいなあかんと思うねん、私。すごい特殊な技能もって人は人やったらいと思いうけど、人がもっててぐらいの技能しかもってないんやったら、特別に配慮してもらっていうよりも、自分ができる範囲の職場に行っただけがいいんと違うかな、って。せやし、そこでどうしてほしいっていう主張はしたくないってうか。

「軽度」身体障害者は、一人でできないことを他者の介助を借りてまで行おうとはしない。そのため、彼らは、自らの選択を「安心してできる環境を優先した」と肯定的に解釈し、自分ができる範囲の参加で納得するのである。

4. 「障害の戦略的呈示」について

「軽度」身体障害者は、生活環境を拡大させていく中で、他者との関係性をもちながら様々な経験をする。

C：(バイオリンで) あるとき発表会でそんな曲をやったら、あるいつも文句いふかなりええことかかへん評論家がぱっと立ち上がって「すばらしい！Cさんの弾く音はすばらしい！きっとあのころのヨーロッパではこんなやさしい音が流れていたんだと思います。」それで、こう鼻がびゅーんと伸びて。それがきっかけやね。最初嫌いやってんけど、音楽でばんばん、人前に出たがりになって。段々段々それで外にできるようになって、すごい、ね、自信ついてるし。そこで性格がね、今風になってき

てん。それで親戚が「音楽の力ってすごいねえ」って言うてて。(その前の性格について) 結構いじけやったし、人の顔色伺ってたし。極度に顔色、その場を乱さないように乱さないように。和を乱してはいけない。

B：大人になってからは(足を見せることが)平気やったけど。歩きにくいこと以外で自信がついたからちゃうかな。見た目じゃないわっていう。

彼らのこうした他者との関係性のもとでの「自信」をもつ経験や加齢に伴う「開き直り」⁸⁾は、障害を他者へ呈示することそのものにも影響を及ぼすようになる。

C (建築家)：自分が障害もってるから世の中の流れがバリアフリー化になって、まちづくり条例とかね、そんなんも総合力としてもってた、もてたんやね。

筆者：建築の仕事で障害を使いたくないと思ったことはありますか？

C：ない。建築、使うのって健常者と障害者やん。障害者で作っいたら妊婦の人でもいけるし。もろに生かせるからめっちゃラッキーっていうかんじやね。

A (障害者団体会長)：スーパーの駐車場に屋根つけてくれ、とか。健常者じゃそういうこと分からんやん。まず気づかせることやな。スペースあっても幅狭かったりね。スロープもつけたらいいと言う人もおるよ。私は福祉住環境コーディネーターとったじゃない。

今回の調査では、建築士や福祉住環境コーディネーターなどの「専門家」として、社会のあらゆるデザインについて意見を言うようになった人もいた。「社会のバリアフリー化」が進むことで、世の中の障害者に対する意識は変わる。つまり「軽度」身体障害者は、「自信」をもったことで、障害そのものを利用した戦略的な生き方を手に入れるのである。

5. 「重度化にそなえた準備」について

次の語りは、「軽度」身体障害者の中年期以降のもの

である。

D: ちょっと、でも手がね、悪くなってものすごく痛いから筋肉が落ちてからはね。筋肉があつたら自由自在に車椅子からも(別の椅子に)移ってたけど。痛いから。車椅子からも降りひんようになったね。やっぱり医者に診てもうたら、骨が使いすぎて変形してしもてて。軟骨もない、言われたからね。治しようない、言われたから。ものすごく不自由になったね。

肢体不自由の障害をもつ彼らの多くは、中年期以降に二次障害や重度化を経験する。

D: 介助を受ける申請はしている。いつ病気なるか分からんってかんじもしてきたし、1回、1ヶ月ぐらい入院したことあるねん、腕がしびれてきてね。4年ぐらい前かな。そんなんも頭にあつて、すぐには来てくれへんやろうから申請だけしとけば明日にでも来てもらえる可能性あるから。

B: 今思うのは、自分がいて誰かに来てもらうっていうのじゃなくて、自分がそういうケア付のところに移るって、そういう方向思ってるねんやんか。そういうセッティングされた中にいるっていうか。それもまあ程度によるかもしれへんけどなあ。・・・ケアハウスとかのチラシもな(集めていて)、まあ、これが払えればあとは年金が入ってくるやん。段々減って行くか知らんけどな。

二次障害がでることや、加齢に伴う「しんどさ」を経験する中で「軽度」身体障害者は新たな対処方法を余儀なくされる。彼らは、早い段階から予め準備をすることで生活における主体性と自己決定を確保し続け、将来への安心を手に入れていたのである。

IV. 考 察

1. 「軽度」身体障害者の困難な場面への対処のプロセス

前章で示した5つのカテゴリーを時系列に分析し直したところ、「軽度」身体障害者の困難な場面への対処の

プロセスが明らかとなった。

このプロセスは3期に分類された。すなわち、I期は1人でなんとか困難な場面を乗り切れる時期、II期は他者のサポートが必要となる時期、III期は加齢に伴う障害の重度化を経験する時期である。

第1カテゴリーはI期、第2・第3カテゴリーはII期、第4・第5カテゴリーはIII期に該当すると考えた。ただし第4カテゴリーは「自信」をもつ経験の時期によって、II期からにもなりうると考えられた。各々を図示すると図1の通りである。

2. 各期における「軽度」身体障害者の障害に関する意識の変容

ここでは、各期における「軽度」身体障害者の障害に関する意識の変容について考察する。

a. I期 一人でできることに意味を見出す

「軽度」身体障害者は困難な場面に直面した時、幼少期の頃は「それしか知らん」かったと「常態化」⁹⁾を示していた。

彼らはまず、姿勢を変えたり体の他の部分で代償するなどして乗り越えようとする。さらには工夫することで困難な場面を乗り越えていた。

B: かなんって言えば、コンクールやなんかで舞台上で立ってなんやらするの、っていうのがすごいつらかったわ。立ってることにものすごく意識を集中させて、楽しめへんし。余裕はないし。・・・舞台やなんかで発表するときも、それも(立ってるの)できひんって言ってなかったと思うねん。みんなと一緒にしてた。人の肩とか持たせてって言った思い出はなくて。そやし、必死で立ってたと思うねん。緊張とあれで。必死よ。

B: しんどいなーとは普通の気持ちで思ってた。特別しんどいとは思ってなかった。足としんどさが関わってるとも思ってた。別に何も言わなかったけど。

彼らは、学校での集団で同じ行動が求められる場面では、楽しむ余裕のないぐらい「一生懸命に歩く」「必死に立っている」などの緊張状態を経験していたのだという。「しんどかった」という認識がありながらも「軽度」身体障害者は他者のサポートを借りようとはしなかつ

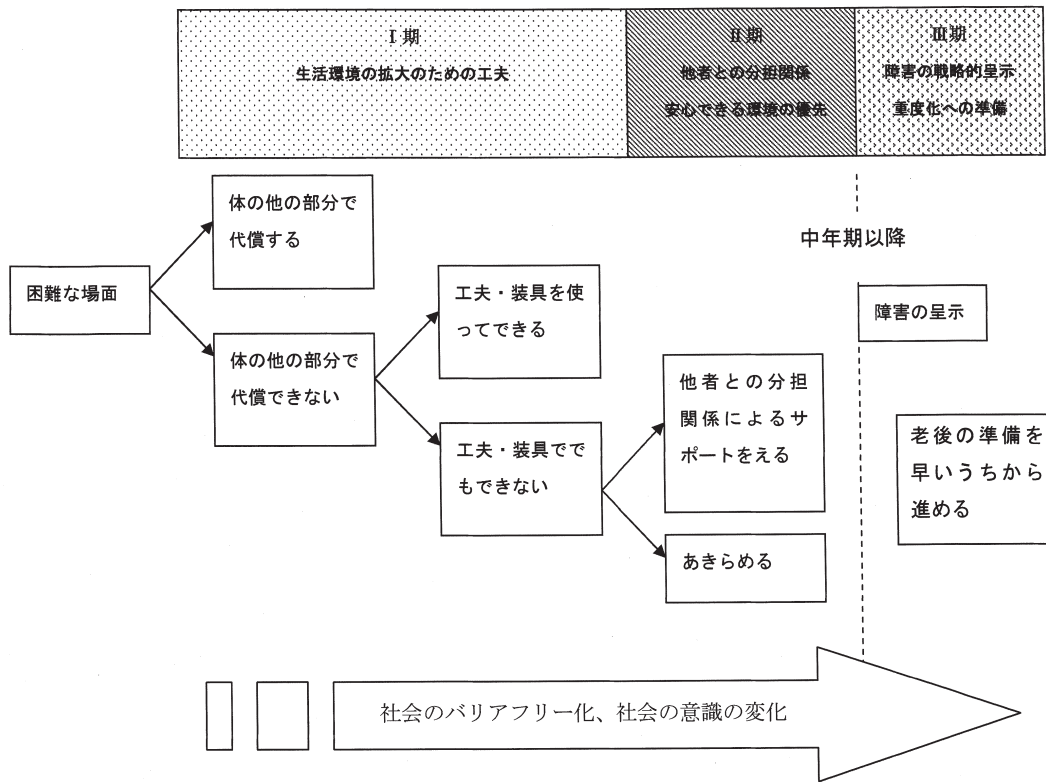


図1 「軽度」身体障害者の困難な場面への対処のプロセス

た。

C：たとえば13階だてのマンション、設計してんけど検査にあがられへんねん。ものすごしんどかった。それは上がったけどね。必死で。

B：けっこうほら、足痛い痛いなってるわ。でも歩いてるわ。歩けるし。歩くもんやと思ってるし。そらこの先は知らんで。だんだん楽チンしようとして。・・・よう歩けた、どうもないわ、っていうときと、あーしんどいわっていうときと。

彼らは大人になってからも、周囲の健常者と「同じ」参加をするために、また周囲からも「同じ」参加が求められるために、「しんどく」ても「必死に」乗り切っていた。

B：したいと思ってるわけじゃなくてするのが当たり前って思ってるのと違うかなあ。究極にはしたいんかなあ。人がしてはることはなんでもしたいっていう。

「軽度」身体障害者にとって、周囲の健常者と同じ行動を「一生懸命」するのは、「当たり前」のことであり、究極には「人と同じことがしたい」という強い思いからである。

D：やっぱりなんぼ努力しても、見る目が厳しいよね。違う目で見られるねん、最初はね。不自由やなあ、いう。よう僕言われんねんけど、〇〇から××の百貨店にしょっちゅう行ってんねん。優雅に仕事してたときなんか食事してね。で、エレベーターなんかで年配の人に「かわいそうやなあ」って言われんねん。そんなもん、向こうのほうがかわいそうやのにね。「どないして来てん？」っていうから「そんなもん、自動車で〇〇から来てんねん」って一生懸命反論してたけどね。優雅に買い物どっしてんのに、見る目なんかそんなやからね。むかつくし。「自分こそ、どうしてんねん？」って言いたいよな。そういう努力をしても、やっぱり見る目が全然違うから。

さらにもう一つの理由として、彼らが一人でできることに意味を見出し、また健常者と同じような生活ができるように「一生懸命」頑張るのは、他者からの否定的なまなざしに対する彼らなりの抵抗であると考えられた。

b. Ⅱ期 他者との関係性の中で障害を顕在化させないための戦略

「軽度」身体障害者は他者のサポートが必要な場合にも、他者のサポートを得るだけの一方的な関係にはならず、持ちつ持たれつ・分担の関係を作っていた。さらに「できる範囲で」折り合いをつけたり、参加そのものをあきらめたりするようになる。

A：私のほうも、あいつらに勝てるのは勉強しかない、って思うやん。

A：かわいそうって言われるのはいややな。話してたらかわいそうっていう思いがふっとんだよ、ってだいたい言ってくれるんやけど、それで人間的な付き合いができる。とりあえず見かけで、気の毒やなって言われるのがいややな。多分その人より稼いでるんじゃないかな、とか私の方がぜいたくな生活してるのと違うかなって気もするんやけど。尺度っていうのが人それぞれ違うから。何をもって幸せとするかっていうのは。その人なりの価値観で、こっちのほうが高いと見えたんかもしれへんけど。

「軽度」身体障害者はその可視的な障害ゆえに見かけで「かわいそう」と判断される経験をこれまで数多くしてきた。だからこそどんなにしんどくても健常者と同じ行動をし、人に「勝つ」ためにたとえば「勉強」という強みを身につけてきたのである。他者の一方的なサポートが「かわいそうな障害者」という感情を助長させてしまうと考えがゆえに、彼らは分担関係だと解釈していたのだと考えられた。

B：1回X山に行ったことあるわ。山岳部の人たちと。職場の人に誘ってもらって。みんな登りにいって、途中のロッジで私、夕食作って待ってたけど。高原やし気持ちいいやん。自分ひとりでは行けへんけど、よかったなーって。気心しれてるやん。気使うときあるやんか。それはかなんし。し

んどいから。そんであんまり気使ってくれはる人もかなんし。なんかぼどぼどっていうのが。

彼らにとって日常生活上で優先される判断基準は、「みんなと同じように参加すること」よりも、他者との関係性においてお互いに「気づまり」¹⁰⁾な感情をもたないこと、他者に迷惑をかけないことであった。彼らのこうした判断は、他者との関係性の中で障害を顕在化させないための「戦略」¹¹⁾であると考えられた。

参加に対して優先順位をつけるという彼らの判断は、彼らに必ずしも後悔の念を抱かせてはいない。なぜなら彼らは大人になってより行動範囲が広がることで、関係性をもつ他者も多くなるためである。前章で指摘したとおり、どれだけ他者との関係性において「自信」をもつ経験をして他者への障害の呈示に躊躇しなくなっている、彼らは「異性といるときは恥ずかしい」「友人とはほどほどの関係でいたい」というアンビバレントな感情も持ち続けていた。つまり彼らは、この時期他者を、障害を見せない関係をつくる他者と障害を呈示できる他者へと区別して、他者のサポートを戦略的に得るのである。

「軽度」身体障害者は、このような「戦略」をもつことで困難な場面向き合うことから難なく逃れ、頑張れば一人でできるという自信を固持し続けることができるのだと考えられた。

c. Ⅲ期 重度化による生活の変化への不安

多くの肢体不自由の障害をもつ「軽度」身体障害者は、中年期以降、二次障害を経験するために体が抱える「しんどさ」は大きくなり、困難な場面への対処方法の変更を余儀なくされていた。

A：まあ、極力人にやってもらおうかな、と。やっぱりね、小さいときは遠慮もしてたけど、社会生活していく中で最近まあ、助け合いの精神もってる人も増えたからやっぱりちょっと言ったら助けてくれるし。

D：やっぱりできることはやって、できないことは頼む、かな。・・・昔は、はずかしくて直に言えないいう人（注：サポートを申し出られない人）多かったんとかやうかな。それとやっぱり人間的にも心に余裕がでてきてるんとかやうの。今はそうい

う人ほど言うてくれるな。

彼らの中には、「障害者を受け入れる社会の風潮になってきた」という社会環境の変化に後押しされて、他者のサポートを受け入れるようになった人もいた。

C：家ではけっこう伝い歩き。狭い家やからね。手の力は強い。軟骨すりへるのが怖いわ。恐怖心はある。楽器できひんようになるのが一番怖い。小指は痛めたからね。軟骨なくなった。フルートしすぎで。

B：不安感。寝込んでしまった後に次歩けるかなあっていうのな。・・・歩けなくなることも、年齢重ねていって体力がなくなってくることも、こないだも階段から落ちたり、気をつけなあかんねんけど。要するに一人で生活できなくなるっていうか、身内に面倒みてもらわなあかんくなるのはかなんって思う。

「軽度」身体障害者が二次障害への準備を早い段階から始めたり他者の介助行為を受け入れるのは、これまでの生活が維持できなくなるのではないかという恐怖心や不安感があるからである。彼らは「準備」を早くから進めることで、重度化による生活の変化への不安を少しでも紛らわそうとしていたのである。

D：普通の生活、というのが楽しかったん
とちゃうかな。・・・そら、車椅子で全部
行ける家やったらそら、疲れへんし、いい
やろうけどね。仕事も一応終わったから、
映画行ったり買い物楽しく行ったりね、悪
いと思うけど、世間に。

彼らにとって「普通」の生活とは、映画や買い物に他者の介助を借りることなく行き、友人との楽しい時間を共有することである。「軽度」身体障害者にとっての二次障害とは「楽しかった」「普通の生活」が壊れてしまうことに対する「恐れ」なのだと考えられた。

V. 結 論

本研究では、「軽度」身体障害者の障害ゆえに困難な場面への対処のプロセスを明らかにした。本研究で示された知見は、以下の3点である。

1. 「軽度」身体障害者は、I期で、社会参加する中で「一人でできること」に意味を見出し、「必死」に頑張れば「できる」という障害観をもつようになっていた。彼らが「必死」に頑張るのは、「人と同じことがしたい」という強い思いと他者の否定的まなざしへの抵抗であった。

2. 他者のサポートが必要となるII期では、「軽度」身体障害者は「安心して一人でできない」場合、持ちつ持たれつとの関係で他者のサポートを得たり、参加自体を「あきらめる」という「戦略」をもったりしていた。彼らが一生懸命同じ行動をすることに「しんどさ」を感じるようになり、やがて「必死」に頑張って参加し続けることへの疑問をもつためだと考えられる。

また、他者との関係性によって、他者のサポートを「介助行為」「分担行為」、さらに「迷惑をかける行為」と変化させていたが、彼らのそうした価値判断は「軽度」身体障害者の特性であると考えられた。

3. さらにIII期では、障害の重度化に伴い、新たな準備が必要となる。「軽度」身体障害者は他者による一方的な介助を受け入れていたが、社会のバリアフリー化が進み、社会の意識が変わったことに後押しされて、他者のサポートを受けることを「迷惑をかける行為」としては捉えなくなっていた。

以上より、「軽度」身体障害者の困難な場面への対処方法やニーズは、障害の重度化や他者との関係性の変化を鑑みると、ライフサイクルにおけるプロセスとして考える視点が重要であると考えられる。今後はライフサイクルの視点から、「軽度」身体障害者の社会参加上のニーズを考察していく必要がある。

VI. おわりに

—本研究の限界と今後の課題—

本研究の限界として、今回調査を行った「軽度」身体障害者は40代が1名、60代が3名であったため、時代背景に影響を受けたことがあげられる。また、障害もポリオが3名と偏った。

以上を踏まえ、今後の課題は次のとおりである。まず異なる時代を生きた対象者の人数を増やし、時代や社会状況による考察を深めたい。成人になってから障害を持った中途障害者との比較についても研究したいと考えている。

また、本研究では「軽度」を「日常生活上の活動の制約や困難の程度が低く、常時は介助を必要としない障害

者」と定義し、困難な場面への対処のプロセスを明らかにした。その結果、他者との関係性において「戦略」をもつなど、彼らが「軽度」ゆえの特性がいくつか示唆されたといえる。今後、「軽度」身体障害者のインタビュー対象者を増やし、さらに詳しく「軽度」という概念を構成する要素について明らかにする必要があると考える。

(引用文献)

- 1) 田垣正晋：生涯発達から見る「軽度」肢体障害者の障害の意味—重度肢体障害者と健常者との狭間のライフストーリーより, 質的心理学研究, 1, 36-54 (2002b)
- 2) 田垣正晋：軽度障害というどっちつかずのつらさ, 部落解放, 501, 100-103 (2002a)
- 3) 石川准：平等派でもなく差異派でもなく, 倉本智明・長瀬修編『障害学を語る』, エンパワメント研究所, 30-31 (2000)
- 4) 田垣正晋：前掲論文, 36-54 (2002b)
- 5) 志賀文哉：身体障害とスティグマの諸相—ハンセン病研究からの一考察, 社会福祉学, 43-1, (2002)
- 6) Miles & Huberman： *Qualitative Data Analysis*, Thousand Oaks (1994) / 川合隆男訳「質的データ分析」『社会調査入門—量的調査と質的調査の活用』, 慶應義塾大学出版会, 275-285, (2005)
- 7) 田垣正晋：前掲論文, 36-54 (2002b)
- 8) 石川准：『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』, 新評論, 30, (1992)
- 9) 田垣正晋：前掲論文, 36-54 (2002b)
- 10) Goffman, E. : *STIGMA Note on the Management of Spoiled Identity*, (1963) / 石黒毅訳：『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』, せりか書房, 91 (2001)
- 11) Goffman, E. 前掲書, 156 (2001)

「軽度」身体障害者のライフサイクルにおける困難な場面への対処プロセス —対処方法と障害に関する意識の変容—

太田 啓子

要旨：本研究の目的は、「軽度」身体障害者が困難な場面への対処のプロセスをインタビュー調査から明らかにすることである。①可視的な身体障害をもつ者、②肢体不自由者、③障害を持ちながら普通学校・普通学級に通い、一般就労を経験した者という3つの条件を満たした「軽度」身体障害者4名を対象にインタビュー調査を行った。

インタビュー調査の結果から、5つのカテゴリーが明らかとなり、さらにカテゴリーを時系列に分析しなおすと「軽度」身体障害者の対処のプロセスが明らかとなった。彼らはできるかぎり「一人でできること」に意味を見出し、やがて他者との関係性の中で障害を顕在化させない「戦略」をもつようになる。そして「自信」をもつ経験をすることで自己呈示が可能となり、重度化への準備にも影響していた。

以上のことから「軽度」身体障害者の困難な場面への対処方法やニーズは、ライフサイクルを通したプロセスで見る視点が重要であると考えられた。